春雨物語「血かたびら」の解釈

勝　倉　壽　一

1．はじめに

上田秋成の晩年の作品集『春雨物語』の巻頭を飾る「血かたびら」は，平安朝初期の大きな変動期，唐風文化の急激な流入による混乱の時代を背景に，平城帝から嵯峨帝への帝位の移譲と，その後に起こった平城上皇の寵臣らの反乱（いわゆる薬子の乱）をめぐって展開する。秋成は，帝位継承の背景と，争乱をまねいた政界の動向や，乱の経緯，主要人物たちの配置などを，六国史や秋成と同時代の歴史書『日本逸史』(鴨祐之，元禄五)，『日本春秋』(日初寂顕，明和三）などの記載を踏まえつつ，多くの史実離れを試みている。とくに，『日本逸史』に「及長精神聡敏。玄鑒宏達。博綜経書。工於文藻。」(巻15) とある聡明で学識・文才に秀でた帝王，また同時に伊予親王事件を挙げて「然性多猜忌。居上不寛。嗣位之初。殺弟親王子母。并命逮治者衆。時議以為淫刑。」(天長元・7・12) と奥深い猜疑心を指摘される平城帝像に大幅な改変の手を加えて，独自の史観を込めた歴史小説を作り出している。[1]

この作品は，中国渡来の儒教思想の浸透と人心の混乱した世相を背景に，日本古来の純朴な「直き」心性と善良にして心弱い「善柔の御さが」を併せ持ち，時代の変動期に身をさらす平城帝を中軸に据えて，儒教思想の心酔者で，その簒奪革命の思想に汚染されて帝位をうかがう「聡明」にして「才学長じたまふ」「さかしき」皇太弟神野親王（嵯峨帝)，帝の側近にあって政治を動かす藤原仲成・薬子兄妹，帝の助言者空海，その他の群像が配される。帝の周囲の人間たちは帝との対応においてのみ描かれ，その言動がおのれの本姿をあらわにすることになる。この構図を，森山重雄氏は回り燈籠にたとえて，平城帝を「他者がおのれの本質を映し出してしまう鏡のような作用」をなすものと解された。[2]

従って，研究の流れも，物語の展開を導く平城帝の人間像とその言動，とくに「直き」心性と「善柔の御さが」の内容，及びその具体的な発現の様相の分析が「血かたびら」の解釈と主題把握の主要な問題として注目され，多様な解釈が行われてきた。

その主なものを挙げれば，平城帝像を統一的・肯定的な人間像として捉える立場からは，「直き」要素と「善柔」の要素に表裏または正負の関係を見て，儒仏二教の流入による「思想的濁流の中に翻弄される」平城帝の姿に「日本古典文学が持つ，最も優れた人間像」を見る中村幸彦氏，[3] 平城帝の寡黙的善柔の性質を美徳と解し，秋成による『老子』の理想的人間像・帝王像の具象化を見る小椋嶺一氏の説があり，[4]「善柔」の語に過大な意味を持たせた平城帝像の造型性の欠如を指摘して作品の否定的評価を重ねる松田修氏，[5]「善柔」と「直き」の二要素の矛盾・反発と精神的欠陥を捉え，人間像の破綻を示す躁鬱病的発現と解する土佐亨氏の説[6]と対立する。

また，「善柔」の性質を「人欲」に最も遠い存在と捉え，相対的に智略にたけた人物より結果的には不幸に至らなかった人物像に秋成生涯の結論を持たせたと解する木越治氏，[7] 秋成の「善柔」「直き」の用例の分析から両要素の同質性と秋成の理想的な帝王像とのずれを説く加藤裕一氏，[8]「直き」に根源的な原点，「善柔」に人格的・現象的な存在者としての性格を見る森山氏の説[9]などが，両要素に含まれた意味の重さと，平城帝の複雑で多面的な人間像を明らかにしている。

主題をめぐっては，日本古来の直く私ない生き方を茶毒する儒仏二教への批判意識の形象化と解する重友毅氏の説[10]をはじめ，平城帝を取り巻く政治・思想界の動きに視点を据えて，「思潮の動き，政界の様から見ても困難な時代にこの善柔の天子の流されてゆく悲劇」を見る中村氏，[11]「繊細な人間性を抑圧して行く人格化された状況の相克」を見る田中俊一氏，[12] 対照的に政治のデーモンに魅入られた平城帝像に重点を置き，「帝の周辺に出没する人物の多彩であり，政治にかかわりあう様々の

生き方であり，時代の濁流・人間を越える政治の魔性」にテーマを求める土佐氏の解釈[13]がある。また，秋成所懐の帝王観の呈示と解する小椋氏[14]，薬子の乱の新解釈の呈示と見る加藤氏[15]，薬子の乱を素材とした徂徠学批判の形象化とする萱沼紀子氏の見解[16]などが，歴史小説「血かたびら」の解釈にふくらみを与えている。

このような多様な解釈が生じたのは，主要人物たちの人間像，言動とその政治的・思想的背景，夢告や怪異事件など，作品を構成する各要素のわかり難さと，それら諸要素間の関連性の把握の難しさに起因する。それは，作品の分裂，形象性の衰退と見る否定的理解と，重厚・適確な構想と凝集・精練された文体の妙を説く肯定的理解との，極端に対照的な評価の対立を生じた原因でもあった。

この作品を子細に読み進むとき，各構成要素の含む問題は，既に通説化した解釈の中にも多く提起される。それは，作品冒頭に示された平城帝の譲位願望の不可解さ，帝の内意を近臣らの意向として「推（し）とゞめたてまつ」っているという不自然で不可解な状況の設定から，「善柔」にして「直き」帝の性格・意志の発現，空海・皇太弟との問答の意義などの問題を経て，薬子の乱を生じた政界の混乱を「かたくしろしめさゞる事なれど，たゞ『あやまりつ』とて，御みづからおぼし立(ち)て，みぐしおろ」す平城上皇の自責・自省の内実に至るまで指摘される。

とくに，「善柔の御さがにましませれば」と理由づけられた帝の譲位願望，帝の「かたくしろしめさゞる」政界・人心の複雑な動き，及び「あやまりつ」という自省の意味を問うことは，一篇の解釈を基本的に方向づけるものであろう。

これら各要素の解釈にあたっては，迂遠で煩瑣な手続きに属するが，最終稿本に至る各稿本間の推敲過程の確認と，人物・事件の設定や，言動，表現の細部における歴史資料の記載との相違の分析，更に秋成の他の論述との関係を踏まえて，各要素の意義と全体構想の把握に進むことが必要である。

『春雨物語』の稿本類のうち，「血かたびら」を含む稿本として現存するものは，佐藤本『春雨草紙』のA・B二草稿，天理冊子本の草稿，文化五年本『春雨物語』，及び富岡本『春雨物語』の四種類である[17]。この四稿本について「血かたびら」の表現内容を分析すると，佐藤本のA・B草稿が現存稿本中の初稿的位置にあり，富岡本が最終稿本であることは疑いないが，天理冊子本草稿と文化五年本の間には表現・構想に大きな相違があり，また両者ともに富岡本との近似性に濃淡があって先後関係は確定しがたい。しかし，太弟側近臣の策謀（佐藤本）と帝の朝政懈怠（同）の記述の削除，天意解釈の批判的表現（文化五年本）の曖昧化，宇治河畔の遊宴の付加（天理冊子本），復位の是非の下問（文化五）の削除などの具体的な取捨・改変・付加の様相を分析することにより，最終稿本に定着するまでの推敲過程や構想の移動を跡づけることができるであろう。

また，「血かたびら」における史実と先行文献利用の具体的な様相については，既に中村氏[18]，木越氏[19]，美山靖氏[20]などの分析・紹介がある。秋成の徹底した史実の虚構化は「史実への挑戦[21]」とも評されるものであるが，歴史資料の取捨・改変・創造的付加などの歴史離れの構想上の意義と，作品冒頭から末尾に至る夥しい「反事実としての設定[22]」の意味を問うことは，虚構による政治・文化史観の形象化を意図した歴史小説「血かたびら」の内奥の秘密を明らかにするはずである。

2．善柔の性と譲位

「血かたびら」を読み進むとき，まず突き当たる疑問は，海内の豊饒と民心の安定，賢臣の輩出などの理想的な治政が語られた後に突然示される平城帝の譲位願望と，それを押し止める廷臣らの意向の不可解さである。

帝が即位後まもなく皇太弟への譲位の内意を洩らされた主要な動機として，従来，皇太弟が「先だいの御寵愛殊」に深く，「聡明にて，君としてためしなく，和漢の典籍にわたらせたま」うこと，及び，帝の「善柔の御さが」と表裏をなす皇太弟への劣等意識などが挙げられてきた。すなわち，皇太弟の「聡明」で「さかしき」人間像は，智略の権化として「善柔」の帝を背後から鋭くおびやかす存在の位置を占め，その存在自体が帝には無言の威圧であり，帝の深層の負い目が政治の場に傷口をさらすことになる構図として理解されてきたのである。勿論，この解釈は，和漢の典籍に通暁した皇太弟に自己を対置して発せられた，帝の「朕はふみよむ事うとければ，たゞ直きをつとめん」という独語を踏まえた推定でもある。

しかし，平城帝が譲位を願う理由は，文中に「天皇善柔の御さがにましませれば，はやく春の宮に御くらゐゆづらまく，内々さたしたまふ」と記されるのみである。帝が皇太弟に劣等意識を抱くとすれば，その理由はいかなるものなのか。その根拠を問うことは，そのまま譲位願望の理由と記される帝の「善柔の御さが」と，薬子の乱を生じたその治政の内実を問うことに繋がるであろう。

平城帝の劣等意識が父帝の皇太弟寵愛によるとすれば，それと対照的に平城が晩年の桓武と疎隔を生じたとする史書の記述と合致する。また，平城帝自身，夢中に示された桓武の御製を皇太弟の即位を望む父帝の夢告として「御歌のこゝろおぼししり」，桓武陵参詣の折の黒雲の怪異を「兼(ね)ておぼす御国譲りのさが」と自覚していた。

しかし，その夢告の感知や譲位時期の到来の自覚が皇太弟への劣等意識と結びつくためには，薬子の女色におぼれて父帝の不興を買った不肖の子という父子間の感情の亀裂の記載が必要条件となる。だが，この著名な人間関係の軋轢は意識的に削除され，帝の思考・行動を制御し，自らの権勢欲の維持を図る仲成・薬子の策謀が記されるのみである。

次に，譲位願望を，皇太弟の聡明さ，和漢の典籍に通暁したその才知への劣等意識の故と見るときには，後に「朕はふみよむ事うとければ」という帝の独語があり，皇太弟に対する心理的圧迫感の表出と解することができるかもしれない。しかし，後述するように，帝の独語は儒教伝播の悪影響と皇太弟の才知への批判意識の表出と解されるものであり，劣等意識の表現とは理解しがたい。

また，平城帝の治政は，作品の冒頭にほぼ完璧な形で理想化されている。「五畿七道水旱無く，民腹をうちて豊としうたひ，良禽木をえらばず巣くひて」と称えられる，中国古代の聖天子帝堯に比せられた泰平な世のさま，賢臣の輩出，記伝の博士らによる敬祝の意を込めた改元の上奏，応神・推古朝の来貢にならって新羅の朝貢をむかえた国威の充実ぶり，更に父帝の「御寵愛殊」であった神野親王の立太子などがそれである。

これを六国史やその他の歴史資料と比較すれば，歴史離れの意図は明瞭である。その事例は，洪水，旱魃，地震，疫癘などが相次いだ歴年の凶作と農村の疲弊，民心の動揺などの史実の無視，大伴・紀などの旧氏族と新興の藤原氏が争い，藤原氏の内部でも南北式京四家が政権をめぐる複雑・陰湿な暗闘を繰り返していた政界の現実の捨象，古代の史実を用いた朝貢の設定，更には父帝の遺志に従って神野親王を皇太弟に据えた平城の広量さと孝心の強調などを挙げることができる。

史書の記載を殊更に無視した平城帝の賢帝ぶりや国威充実の証拠の列挙は，治政の安定と，劣等意識をいだく根拠の乏しさ，更には退位の不必然を明示するものであろう。たとえ，治政の安定と豊饒が賢臣の支えと天地自然の恵みによるものであり，帝の政治手腕や個性とは無縁であったとしても，天地自然の支えと民情の安定こそが王権の基礎であってみれば，平城の治政には早急に譲位を促される積極的な理由などは存在しないことになる。

従って，その譲位願望は文字通り帝の生来の「善柔の御さが」に起因するものと理解すべきものであろう。

六国史をはじめとする史書類が伝える平城帝像は，聡敏な精神の持主，経典に通じ，詩文の才に秀で，道理に通達した英才であり，親政への熱意強く，六道観察使の設定に見られる政治的識見と施策，台閣に擁する多様な政治的能力を活用・駆使した活気に満ちた施政で知られる。一方，父帝の崩御時に見せた激情型の性格，伊予親王事件にあらわれた猜疑心強く狭量な人間性，皇太弟廃太子の謀計をうわさされた智謀の人，生来の病弱な肉体と早良親王の怨霊への畏怖から王権への強い執着を残して帝位を放棄し，薬子の女色に溺れて朝政を歪めた愚昧な君王とするなど，その評価は褒貶半ばする。

この複雑で多面的な人間像を消極的で曖昧な性格，寡黙で静的な帝王像に改変・造型した主な意図は，太弟側と仲成・薬子らの勢力が拮抗する政界を統御するに足る政治的資質の欠如と，政治的意志の希薄さを印象づけ，あわせ鏡の半面に権勢欲と術数を弄する政界の群像を映し出す効果を狙ったものと考えられる。

即ち，「善柔」にして「直き」心性は，政治的資質の欠如の自覚から帝位放棄の願望を生み，その内意の吐露が皇位継承の早期実現を期待する皇太弟の策動と，譲位による民心の動揺，国費支出の増大などを理由とする仲成・薬子ら近臣の激しい諫止を招くことになる。帝の投じた一石は，帝の「善柔の御さが」と頻発する怪異事件を幸いに事

実上の簒奪をもくろむ皇太弟側と，頼むに足りない帝王を擁して権力の維持をはかる仲成・薬子らの熾烈な対立と，権謀術数や武力による争奪を生じてしまうのである。

しかし，既に，『雨月物語』「白峯」において「天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるを」と帝位が規定されるものである以上，私的欲望に発する簒奪が否定されるのみならず，私意による譲位も批判されねばならない。「白峯」の崇徳院が西行の帝位神器論の前に「今事を正して罪をとふ，ことわりなきにあらず。」と屈服し，仲成・薬子の策謀による平城復位の試みが挫折したように，平城の退位が私的願望優先の思考に止まるならば，批判の対象であることを免れないからである。

秋成は既に皇位継承を論理づける禅譲思想が背後に含む欺罔への批判をしばしば述べていた。

○　彼堯舜の臣民に譲らせたまふるを之れ善に過て後世簒立を禅位と譌るは，唐虞の害也と論ぜられしは，書を読て識博き卓見聴つべし。（安安言）

○　堯が舜に天下をゆづりしはよき私也。蕩が「網の三隅をのぞきて，一隅をえん」と云（ひ）しは，私の始なり。周が天下を治（め）て，〔姫〕氏は四十二国を立て，殷の跡は宋一国を立（て）しは，聖人も私をせられし也。此私が名目となりて，奪ふて代るを禅位といふよ。（胆大小心録・4）

○　堯が舜に譲り，舜が又商にゆづりしは，よい私にて聖人とたふとむ。「三隅の網の一隅は我に」と云（ひ）し人が，わたくしの始よ。殷のあとは宋一国にて，姫氏四十二国とは，武王・周公のわたくしよからず。（中略）此国にては，神武の東征あそばして，にぎ早日のしらせし中土を奪ひたまふが，私の始にて，代々を云はゞ多き事はかりがたし。（同・異本）

中国古代史上の理想的な太平の世と称えられる唐虞三代の帝位移譲が，古代社会の善的精神に根ざした理想的交代であるとしても，それは私意による禅位に外ならないとする指摘であり，中国古代の聖天子伝説に隠された簒奪を禅位となす欺罔が伝幡し，日本古代の皇位継承に混乱をもたらす因となったとする批判的意識の表明でもあった。秋成は，儒教舶載による簒奪思想の弊害について，「入唐の益は交易のみなり。仏教，儒道のさかしきを習（ひ）ては，簒位弑逆の事やまず，百年干戈の休む時なし。」（胆・160）と鋭い批判を発している。

従って，私意による禅譲が簒奪の因となり，争乱を招くとすれば，禅譲思想の否定の上に立つ新たな論理の構築が求められねばならない。平安初期の皇位継承問題に題材を得た本篇は，熾烈な争闘を重ねる政界にあって，禅譲の欺罔を排した帝位移譲の方策を模索する善柔な帝王の挫折の物語であった。

3．夢告の意義

ある夜，帝は夢中に皇太弟の即位を望む先帝（桓武）の御製を聞き，次の夜は早良親王の霊の嘆きを帯した先帝の使者が夢枕に立つ。帝にはこれを自らの「み心のたよわさ」による「あだ夢」とする自覚があったが，崇道天皇の追号を贈られる。一方，近侍する仲成・薬子らは占夢による判断の根拠を否定し，「御心の直きにあしき神のよりつくぞ」と進言して帝の動揺を抑える。また，諸国の社寺に奉幣使が派遣され，伯岐の国に隠棲していた玄賓が召されて盛んな加持折禱や調剤が行われる。

この夢告が小説の展開に示す位置づけについては，従来，帝自身の抑圧された意志が内攻して一夜の夢に具現した深層心理の表白と捉え，その「善柔」にして「直き」性格を仲成・薬子らの傀儡と化していく必然的条件と見る説[23]，夢が桓武と皇太弟を結ぶ糸を示し，桓武の意志の体現者として譲位をせまる皇太弟の位置づけを示したと見る説[24]，夢を通して平城帝に干渉する桓武の意志と仲成・薬子の否定との狭間で判断の不可能に陥る平城帝像を見る説[25]，過敏な神経症的性情の表出と見る説[26]などの多様な解釈が行われている。

夢告の解釈の根拠を稿本間の異同と推敲過程に見ると，帝の自覚は四稿本の全てに記されているが，崇道天皇追号の件については佐藤本は該当部分を欠いており，天理冊子本には記載がなく，文化五年本，富岡本に記されている。従って，崇道天皇贈号は「あだ夢」とする夢告への自覚と行動の分裂，不整合を示す帝の「み心のたよわさ」の具体例として加筆されたものと思われる。

また，仲成・薬子の進言のうち，「御心の直きに」の部分は佐藤本では「御心のよわきに」となっていた。帝の善柔の性格を端的に指摘する言葉であったが，これを「直き」心と言い換えて「み心のたよわさ」を自覚する帝の心中との対照を際立たせるとともに，善柔の性格と同様に「直き」心性も政治的に不適であることを強調したものと解される。

この夢告の解釈と位置づけをめぐっては，夢告場面の構成に示された秋成の史実離れと史料操作の方法に注目しておく必要がある。

平城の夢中に用いられた先帝の御製は，『日本逸史』巻七・桓武天皇延暦十七年八月十三日の記載によれば，遊猟の際に伊予親王の山荘で詠まれた即興的な歌にすぎず，意味内容においても皇太弟と直接関わるものではない。

また，諸史書に記された早良親王事件は，藤原冬嗣暗殺事件の加担者として捕えられ，皇太子位を廃された早良親王が，淡路島に配流の途次絶食して自殺した事件を指す。早良の死は朝廷への抗議と見られるものであり，桓武による同母弟早良の廃太子と長子安殿親王（平城）立太子のための冤罪のにおいが濃い。崇道天皇追号の事も，執念深く祟る早良の霊への謝罪のために行った桓武天皇延暦十九年七月二十三日の史実を改変したものであった。

この改変は，平城の治政の不祥事として著名な伊予親王事件の捨象と深い関わりがありそうである。大同二年十月に起こった伊予親王事件は，謀反の罪で捕えられた藤原宗成が朝廷の糾問に対して伊予親王が主謀者であると主張したために，親王と母藤原吉子は大和の川原寺に幽閉され，毒を仰いで自殺するという突発的な事件であった。事件は，宗成の配流，連座の罪を問われた藤原南家の大納言雄友，中納言乙叡の失脚をもって終局する。

『日本後紀』にはその苛酷な拷問の様が「侍従中臣王連伊予親王之事。経拷不服。時嬖臣激帝令加大杖。王背崩爛而死。」(巻17) と記されている。「嬖臣」とは，帝に近侍していた薬子・仲成兄妹を指すのであろう。また，仲成誅殺の折の嵯峨帝の詔は，仲成の悪行を挙げて「己我妹乃不能所乎波不教正之氐。還恃其勢氐。以虚詐事。先帝乃親王夫人乎凌侮氐。棄家乗路氐東西辛苦世牟之。」(日本後紀・巻20) と述べており，「先帝乃親王夫人乎凌侮」とある記載を伊予親王事件と結びつけて仲成の主謀による疑獄事件と見るのが通説となっている。

ともあれ，この事件は王権をめぐる宮廷内部の熾烈な対立と猜疑・反目を際立たせた事件であった。

歴史学の所説によれば，この事件は輩行的傾向を帯びた皇位継承が生み出す熾烈な競合の産物ということになる。平城の治政においては，神野親王以外の桓武の親王にも皇位継承の可能性があり，王権の不安定さが神経質な平城の猜疑心をかきたてることになる。それが天皇としての平城の弱点であり，その弱みにつけこんで平城に接近し，策略を弄して異数の栄進をとげたのが仲成・薬子の一派であった。そのことはまた，宮廷人の天皇への失望と警戒を生み，反面，皇太弟の存在を浮かび上がらせる結果となったという。[27] 平城の病的な質実さと，伊予，神野の派手好みな気質の対立，違和感が事件の基底にあるとも説かれている。[28]

皇位をめぐる争闘について，『水鏡』は「桓武天皇未御存日ノ御時，第一ノ御子御恙モ無リシ平城天皇ノ御在位ヲヲロシ奉給テ，第二ノ御子嵯峨ノ東宮へ御位ヲ進ゼサセ給タリキ。此事故ニ御合戦アリト見タル本アリ」と記して桓武による平城下ろしの流説を伝えており，『扶桑略記抄』二，『愚管抄』は平城による神野下ろしの流説を伝えている。後者は，平城の桓武陵参拝の折の黒雲の怪異として「血かたびら」に借用されている。

この一連の事件や流説の存在，伊予親王事件と早良親王事件の酷似，両事件の冤罪的性格，皇位継承をめぐる廷臣らの競合と暗躍を集約的に描くのが，夢告の構成と意図であった。

夢告はいづれも先帝の遺志や意向に過敏な平城の深層心理の表出であり，それ自体は「あだ夢」と否定されるべきものであった。神野登極を期待する先帝の遺志と平城の譲位の意向とは本来切り離すべきものであったが，それを父帝の意向に即した選択と解するのが「み心のたよわさ」であった。また，平城は夢に「早良の親王の霊かし原の御墓に参りて罪を謝す。」と聞いているから，冤罪事件とも，それが自身の立太子に関わる疑獄事件とも自覚していなかったことになるが，尊号追贈の処置は，早良事件に冤罪のにおいを嗅ぎとり，自身への関わりを推察した平城の，「あだ夢」と否定しようとして否定しえない「み心のたよわさ」を顕示したものと言えよう。

一方，一族道鏡の暴逆を嫌って深山に隠れ住む玄賓は，朝廷に召し出されて妖魔の調伏・退散のための加持祈禱を終えると，帝の命令を辞して再び山中に去る。その辞去の理由は「思ふ所やある，又も遠きにかへりぬ。」とおぼめかされているが，物の怪その他の妖怪は「やらひし」とあるから，帝の悩みの原因がその他のもの，即ち現世の人間悪にあることを洞察したうえでの辞去を暗示するのであろう。

玄賓の逸話は，仲成・薬子を道鏡の暴逆に重ねる暗示的効果をも生じている。玄賓の辞去は政界の汚濁から身を守る方策としての深山避難と，抗議の姿勢を明示するものであったが，帝には同様の避難，逃避の自由はない。帝には政界の混乱を回避する努力の責務と，政道の正常化の悲願が存在したからである。

玄賓の辞去を機として仲成は「外臣を遠ざけんとはかりて，薬子と心あはせ」帝の意志として政界を動かす策謀をあらわにする。帝に残されたのは幽閉に似た「なぐさめ」であり，「よからぬ事も打（ち）ゑみて，是が心をもとらせ給」うことによってのみ帝位にあり得る状況を帝に認識させることになる。「棹鹿は」の歌，「御こゝろすがすがしく，朝まつりごと怠らせ給はず。」という帝の心境の変化は，仲成・薬子の意志にからめとられた自己の存在の認識と，退位の時期の熟するのを待つ一種の諦観に似た心境を指すのであろう。徹底した自己滅却と一切の抵抗の放棄による自己の存在の場の確保であり，「たゞ直きをつとめん」とするひそかな処身の決意でもあった。

4．空海への下問

胸中に退位の意志を秘めながら，帝は具体的な統治の実態，政権交代の様相について空海に先例を問う。空海は，殷の湯王が禽獣の網の三方を開いて民心を得た故事を引いて為政者の私意私欲の胚胎を指摘し，いかなる国も理論が先にできて始まるのではないこと，民は天地自然のいとなみに従って生活し，私欲による為政者の禅位簒奪には無関心であることを説いて，「たゞたゞ御心の直くましませば，まゝにおぼし知（らせ）たまへとこそ。」と進言する。

従来，この帝の下問と空海の奉答とは帝の決断の重要な契機となっているのか，深く関わっていないのか疑問が提起され，多様な解釈が行われているが，いまだ決着していない。

問題は，空海との問答以前に「兼（ね）ておぼす御国譲りのさがにやとおぼしのどめて，更に御悩み無し。」という平静な心境にあった帝が，当代一の知識人として設定された空海に政権交代と王位継承の先例を問うことの必然性の有無に関わっている。空海の進言は帝をして「打（ち）うなづかせ給ひて，『よしよし』とみことのらす」同意と満足を与えたと解されるが，それは翌日の譲位の宣旨に直接深く関わるものであったか，また，空海との対話が帝の行動に重要な意味を持つならば，なぜ再び太弟に同様の問いかけがなされ，「煩し」と帝自らが打ち切る問答が設定されたのかという疑問である。

これらの疑問に対しては，帝の意図と空海の勅答とのずれを指摘し，空海の設定，平城帝の造型性の欠如に及ぶ否定的見解[29]をはじめ，空海との問答は帝の行動に直接働きかけえなかったものと解し，相互影響関係を構想しない小説の方法を説く見解[30]，皇太弟の即位が必然か確信のない帝の事実として世襲か革命か王位継承の道理を求めた下問に対し，直き帝王の政治がもはや存立しえない時代を見通した空海が示した帝の生き方の示唆に，帝がその真意を理解できなかったとする見解[31]，更に，譲位の理論的根拠や示唆を空海の歴史物語に求めた帝に対し，空海は直接の提言をもってこれに応え，帝の心中の在位の気持と完全に一致したために譲位の意志が薄らいだものとする見解[32]などが対立している。

歴史書によれば，延暦二十三年に入唐した空海は，平城帝の即位直後の大同元年十月に筑紫に上陸したが，高階遠成に託して『請来目録』を献上し，太宰府にとどまる。空海の入京と京都止住の許可が下りたのは平城譲位後の事である。平城朝の空海冷遇・忌諱と嵯峨帝の寵遇の理由として，空海と伊予親王の親交を挙げる説もある[33]。

また，秋成は空海の呪法論に注目し，「天津処女」に仁明帝の下問に対する勅答として用いている。「血かたびら」でも佐藤本に平城帝の下問への勅答の中に出るが，文化五年本，天理冊子本，富岡本は削除し，代りに秋成の持論である湯王の故事の解釈を語らせている。従って，空海の奉答は次の皇太弟に対する帝の鋭い放伐批判と相俟って，平城個人の処身のみならず，皇位継承一般に対する秋成の所信を託したものと考えられる。

当代第一の知識人である空海に求めた帝の問いは「三皇五帝は遠し。其後の物がたり申せ」というのであり，中国の聖王伝説ではなく，自らの思慮・判断の材料とするに足る具体的な統治の実態，政権交代の様相を問うものであった。その問いの背景には，近臣による皇太弟讒訴に接した折の深い疑問が存在している。

> 皇祖〔尊〕矛とりて道ひらかせ，弓箭みとらして，仇うちしたまふより，十つぎの崇神の御時までは，しるすに事なかりしにや，養老の紀に見る所無し。儒道わたりて，さかしき教にあしきを撓むかと見れば，又枉（げ）て言を巧みにし，代々さかゆくまゝに静ならず。

この独語の前半部は『寛政改元』(寛政元）に説かれた秋成所懐の政治史観を，後半は同じく『遠駝延五登』などに縷説の儒教批判を凝縮した形で呈示したものである。

> 天皇日向より出でたゝして，大和の国に来り給ひ，まつろはぬ仇を亡し，畝火の橿原の宮に大政事聞召しゝ後，崇神のおほん時まで御代は十嗣，歳は四百五十余年が間，しるすべき事もあらざるは，君は神ながらに直くましまし，臣達は私心なく民草も偽をならふ事なきにぞ，浦安の国と祝ひことほぎ奉るなりける。彼のおほん代に武埴安が叛きまつれるを事の始めにて，代々毎にこそあらね，或は御はらから御墻の内に鬩ぎあひ，或は臣達もきたなき心を抱きつゝ，民草をさへ横風に吹き靡かするほどに，凡そ千七百余年が間は弓末振りたて剣とりしばる事，百とせのいとま無かりし。　(寛政改元)

崇神天皇の御代までは「君は神ながらに直くましまし，臣達は私心なく，民草も偽をならふ事なき」世であったために正史の記録も簡略であったが，以後は皇族間の争闘と廷臣の策謀や専横のために争乱を招いたという。同論は続いて蘇我蝦夷や道鏡らの専横と皇室への非道を挙げて，「君かくまで礼を乱り給へば，臣達も即ならひて，三代の帝を島守となし奉る世も出できぬるぞかし。」と説き，更に，南北朝，戦国の世を挙げて，「これらの跡を考ふるに，君はかしこきためしを取り違はせ給へる故とは申しながら，臣達の罪ぞ軽からざりける。」と批判している。

即ち，応神朝以後の儒教の伝播が国情を変質・紊乱させたとする持論である。秋成は既に古代の帝位争奪について，近江朝廷の皇位継承への不審を「如是王宗骨肉の離るゝ事の始は，異国の書に禅位簒立の智略を見聞きて，天性の情欲を募らせ給ふ事のうれたけれ。」(金砂・6）と説いていた。

しかし，後半部の儒教批判は，直接に皇太弟讒訴に対応するものでも，儒教そのものへの批判意識の表出でもない。帝の批判は，儒教の「さかしき教」が「あしきを撓む」本来の機能を果たさず，歴代の帝王，群臣が「枉（げ）て言を巧みにし」て争乱を生じてきた政治史への批判として述べられたものである。秋成は，儒教伝播の影響について，その教義が人間の本来具有する「情欲にたがへば，嵯峨の御時より盛也といへども，実学を修したまふにあらず，奢靡になりゆく，是も亦ひとつの煩ひと思ゆ」(遠駝延五登）と述べており，「善に揉むる道」の実学を怠った原因として嵯峨の治政を挙げている。

従って，帝の独語は，讒言者，皇太弟の対立者である仲成・薬子，及び皇太弟の知謀に対する批判の表出であったと考えられる。この独語に続く「朕はふみよむ事うとければ，たゞ直きをつとめん」の言葉は，漢籍が語る恣意的で欺罔を含む統治の論理を拒否し，仲成によって政治的不適格を指摘された「直き」心性を唯一の拠り所として現実の政務にのぞむ，悲壮な決意を吐露したものであった。

空海への下問は，わが国の先皇の治績や先例，漢籍などに学ぶことができない苦悩を蔵した問いであり，聖王伝説などに隠蔽・糊塗されない具体的な先例を問い求める切実な問いであった。帝の苦悩と迷いを知る空海は，むしろ聖王伝説中から湯王の故事を引いて聖天子の世から「私」が作用した事例を指摘し，譲位は私意によるもので簒奪を禅位というのに相当すること，統治の対象としての民の存在を認識すべきことを説く。

この勅答のうち「たゞたゞ御心の直くましませば，まゝにおぼし知（らせ）たまへとこそ」(富）の部分は，文化五年本では「たゞたゞ御心の直くましますまゝに，まつり事聴せたまへ」とあり，「直き」心のままの統治を進言したことが明示されて

いる。「おぼし知（らせ）たまへ」への改変は，自由な意志による退位の決断の保障を与えたと解するよりは，在位も退位も「私」を去った「直き」意志による決断を求める建言への変更を意味するものと思われる。

また，「民の心にわたくしなし」の言葉は，統治者に対する私心の介入の戒めとして，平城の譲位の判断に私心が混在することを戒めるとともに，次の皇太弟の勅答との明瞭な対照化が構想されていた。従って，空海の進言は「五畿七道水旱無く，民腹をうちて豊としうた」う現在の治政の安定と民情の豊かさが，外ならぬ帝の「直き」治政によることを説き，退位の必然的契機は存在しないことを確認する意味を持っていたと思われる。

5．皇太弟との問答

空海との問答で判断の方鍼を得た帝は，次いで伺候した皇太弟に周漢両王朝が長く続いた理由を問う。「さかし」い皇太弟は，帝の「御心をはか」って，周は四代昭王の時に王威が衰え，前漢は高祖の死後まもなく呂氏の乱が起こっているが，これは帝位にあるものの「つゝしみの怠り」が原因ではなかったと答える。帝は太弟が暗示した天命思想の多義性を批判し，太弟は無言で退出する。その翌日，譲位の宣旨が下る。

この対話部分の解釈をめぐっては，太弟の応答の分析から，「つゝしみの怠りにもあらず」という謎めいた付言に込められた儒教の禅位簒奪思想容認の姿勢，君主交替を告げる天の時に逆らった帝位への固執が乱れを生むというほのめかし，また，周漢の事例にとりなして帝の周囲の非難を避けつつ目的達成をはかる周到な計算などの太弟の「さかし」さが明らかにされている。[34]

一方，帝の述懐と対話を打ち切った処置については，「天」の概念の究明は会話の進行上提示された不要の命題であり，帝は「是は多端也」「あな煩はし」と結論の把握を放棄したとする解釈，[35] 帝は太弟の言葉にたじろぎ，混乱した言葉を語りながら太弟の意のままに位を去ったとする解釈[36]と，太弟の暗示した天命の論理の恣意性，抽象性，煩雑性を指摘し，智にたけた太弟の見識を暗に風刺したとする解釈[37]が対立するが，作者の意図が儒教の知謀に対する批判意識の表出にあったことは認められている。

まず，作者の構想を稿本群の異同の比較から確認しておくと，次のようになる。三稿本のうち富岡本は全文を，他は表現内容の相違する部分を抜き出す。

○　太弟参りたまへり。御物がたり久し。のたまはくは，「周は八百年漢四百年，いかにすればか長かりし」とぞ。太弟さかしくましませば，御心をはかりてこたへたまはく。「長しといへども，周は七十年にて漸衰ふ。漢家も又，高祖の骨いまだ冷（え）ぬに，呂氏の乱おこる。つゝしみの怠りにもあらず」と答（へ）たまふ。「さらば天の時か。天とは日々に照（ら）しませる皇祖の御国也。儒士等，「天とは即（ち）あめを指（す）か」と聞けば，「命禄也」と云（ふ）。又数のかぎりにもいへり。是は多端也。仏氏は天帝も我に冠かたふけて聴（か）せたまふと申す。あな煩はし」と。太弟御こたへなくてまかん出たまへり。　（富）

○　……つゝしみの怠りにもあらねど，天の時にかあらん。……あなあな，天といふ物の愚なるにはこゝろ得がたしと。……　（文）

○　……あな煩しとうそ吹たまへば，御こたへなくてまかん出たまへり。　（天）

佐藤本は帝と皇太弟の問答に相当する部分を欠いており，間に太弟の密旨の奏文を挟んで，空海との問答から直ちに譲位の決定がなされている。従って，この問答部分は作品成立の初期から構想に入っていたものではなく，空海との対話との対照関係で，太弟の思想を明瞭化すべく付加されたと思われる。

次に，太弟の返答部分を見ると，文化五年本は周漢の衰退，内乱の発生が為政者の「つゝしみの怠り」が原因ではなく，「天の時」であるとする太弟の所信，即ち，地上の王権の交代を天の意志にゆだね，合理化する中国の王朝交代の論理を明示した表現になっている。これに対して，富岡本は「太弟さかしくましませば，御心をはかりてこたへたまはく」とあり，譲位と在位の間で揺れ動く帝の心中を計り，あえて中国の天命思想を明示せずにその論理への従順を求める暗示的な表現に止めている。

また，帝の反問部分では，文化五年本は「天の時にかあらん」という太弟の返答に対する直截な反駁と，儒教思想への嫌悪の感情の表出が見られる。「天といふ物の愚なるにはこゝろ得がたし」の文意は，天の語義は愚かな自分には理解しがたいという慨嘆か，天の語義に多くの意味を含ませる愚かしさは納得しがたい意か判然としないが，帝の問いが太弟の答への反問として，太弟の所説の否定，拒否の意を含むことは認められよう。天理冊子本は「煩し」と問答を拒絶し，太弟を殊更に無視する冷やかな態度さえ示している。

富岡本は，これら稿本の構成を踏まえて，自らの思想表出を避けて暗示的効果を計る太弟の「さかし」さと，禅位簒奪思想の恣意性，「天」の多義性を指摘する帝の駁論の対立が構想されている。即ち，帝の反論は「天の時」の到来を暗示した太弟の「さかし」い返答に対して「さらば天の時か」と太弟の意中を鋭く直接に突き，「天とは日々に照（ら）しませる皇祖の御国也。」と天の語義を明示した上で，儒者，仏者が説く天の語義の多義性，天の位置の転倒を挙げて，太弟の論理を「煩はし」と一蹴したものと理解される。

また，三稿本を通じて帝の駁論と批判の内容は一貫しており，秋成は帝の言動に動揺や混乱した心理を含めるよりは，むしろ一貫した否認の姿勢を込めたものと解すべきであると思われる。

なぜなら，この対話部分は秋成所懐の中国古代史観，儒教思想批判を凝縮・集約した形で構成されている。まず，皇太弟の返答に相当する中国古代史観は，既に『寛政改元』に次のように明示されている。

> 文王の沢枯骨に及び，魯公の賢をたふとび親をしたしみ給ひしも，ほとほと百年を待たずして周の道やゝ衰ふと云ふ事，昭王の代に至りて見えたり。ひんがしの都に遷りましては我足利の世々に等し。漢帝の器大いにして有為の君とか仰ぎしも，骨だに冷えぬほどに呂氏の乱れあり。文帝は沈潜にして柔に克ち，武帝は高明にして剛に過ぎ，共に面に譲りてうらには実なく，偽を民に示す事こゝに始むかといへるもあり。周朝八百年，漢家四百年といふも，指を屈むればさる事にて，治はわづかに百年を余すこと能はず。唐の太宗こそ希世の君とたふとめるも，其弟の妃を納れて内の守り無し。武氏の簒，太真の乱，端を此君に起せるものぞ。五代の争ひに及ぶまでを，なぞも三百年の朝と称すべき。

皇太弟の説く中国古代王朝交代の認識は，周漢の衰亡，内乱の発生の因を「面に譲りてうらには実なく，偽を民に示す」簒奪革命思想の弊害と為政者の不徳に求めるこの論説を反転し，為政者の修養・人徳を超えた天意到来の証として呈示されている。

一方，儒者・仏者の説く天の語義の多義性批判は，『胆大小心録』100に次のように記されている。

> 天にさまざまあるはいかに。儒・仏・道，又我（が）国の古伝に云（ふ）所ことごとくたがへり。天とあをぎてのみもあらず。天禄・天資・天命・天禀など儒にはいふ也。仏の天帝もくだりて，我（が）法を聞（く）となり。切支丹等の外道の法は，たゞ天師〔と申〕（し）て，天に尊称の君あり，これを願へり。この国には，天が皇孫の御本国にて，日も月もこゝに生れたまふといひし也。是はよその国には承知すまじき事也。

「天」の語義は各思想体系の相違により独自の概念を有するとする指摘であり，日の神が四海万国を臨照すると説く宣長の皇国観を駁したものである。帝の太弟批判の言辞と同様の言説は，他にも『呵刈葭』(寛政２）前篇，『七十二候』(文化２)，『茶瘕酔言』(文化４，５頃) 41，『胆大小心録』103などに繰り返し説かれている。秋成の確固とした信念の表出として，帝の太弟批判に重みを加えるものであり，帝の反問が結論把握の放棄や混乱した心理の露呈を意味しないことを傍証するものと思われる。

皇太弟に対する帝の下問の真意は，「儒道わたりて，さかしき教にあしきを撓むかと見れば，又枉（げ）て言を巧みにし，代々さかゆくまゝに静ならず」という政情認識と憂慮に発していた。従って，「周は八百年漢四百年，いかにすれば長かりし」という下問は，次代の統治者である太弟に国家の平安・長久のための施政の精神を問うたものと解すべきであろう。

帝には既に自身の退位の願望と，先帝の遺志，譲位の時の前兆の自覚があり，また，空海の勅答

から禅位簒奪の論理を超えた施政の方鍼を得ていた。一方，譲位の阻止をはかる近臣らの策謀，政権交代による内政の混乱や権力争奪の恐れも十分に予測しうることであった。従って，太弟への下問は，その混乱の回避のために太弟の存念を確認する意味を持っていたのである。しかし，太弟の返答はむしろ権力争奪を容認する姿勢を含んでいた。帝の反問は，帝位神器論に立つ継承者への戒めの言葉として，政権の交代を「天の時」とする太弟の恣意的な論理を鋭く論破したものと考えられる。

帝の眼に「おこたへなくてまかん出たま」う太弟の姿は，改心または訓戒の効果と映じたのであろう。退位による内政の混乱を回避する方策を尽くし，心残りの解決を得た帝は，安んじて譲位の宣旨を発して旧都奈良に向かう。

6．譲位と薬子の乱

帝位を嵯峨帝に譲った平城上皇は，退位後のお住いを七代の都であった奈良に定められ，御幸の途次宇治の河畔に遊宴を張られた。

この段落の位置について，佐藤本草稿には譲位の宣旨と下居の宮の決定の記述はあるが，奈良に向かう上皇の開放的な心理と御製，薬子や近臣の心理や詠歌による対応，問答などは構想されていない。また，文化五年本も富岡本の「網代の波はけふ見ねど」から「猶多かりしかど忘れたり」に相当する部分，即ち宇治河畔における遊宴の部分が全て欠落している。

この場面は，千鳥の鳴き声を愛でる上皇と，「衣手さむし宇治の川波」の詠歌に託して退位への不満を洩らす薬子，「河風はすゞしくこそ吹け」と鷹揚に応じる上皇，左中将藤原の惟成の変らぬ臣従の誓いの歌，兵部大輔橘の三継の宴遊歌が配されて，都の政争の場からの離脱をはかる上皇と薬子ら近臣との微妙な確執を描いている。従って，この部分を欠いた文化五年本では政界の人間像を暗示する「この手がし葉」の語義をめぐる問答も，薬子が「それは，ねぢけ人にこそ，直々しきにはいかで」と申し上げるにとどまっている。

一方，天理冊子本は富岡本とともに該当部分を持ち，宇治河畔における詠歌や「この手がし葉」の語義に託して，専ら風流の世界に開放感を味わう上皇を再び政治の場に引き出そうとする薬子の策謀を印象づける緊密な構想を持っている。この段落に関する限り，天理冊子本の該当部分が文化五年本で削除されて富岡本に復活したものとは考えがたく，文化五年本から天理冊子本への発展と富岡本における定着を推測させる。

ところで，譲位後の心境を託したかに見える上皇の御製「ものゝふよ此橋板のたひらけくかよひてつかへ万代までに」は，その意味内容，波紋の大きさにおいて，上皇の趣意を越えて重大なものであったと見なければなるまい。この歌は，武力をもって仕える武士団に向けられており，自らの意志で帝位を嵯峨帝に譲られたにもかかわらず，その帝への忠誠を求めるのではなく，都にあっても（即ち嵯峨帝の治政下においても）在位中に変わらない自らへの忠誠を求めたものである。政治的にはかなり不穏な内容を含むものであった。

また，「この手がし葉」の問いも，『万葉集』巻十六「奈良山の児手柏の二おもにかにもかくにもねぢけ人の徒」(3836) の歌と奈良坂の地名の連想から奈良山名物を尋ねたのであったが，近臣らは歌意に含まれた上皇の内意を推量し，忠誠の誓いを重ねることになる。退位後の平城の言動は，その「直き」性格のままに発せられた，風流心に遊ぶ率直な開放感の表出であったと見てよい。しかし，薬子らの無念な思いをはぐらかす態度と，その無防備な言動は，上皇の内意を探る側近の緊張と復位の期待を生み，嵯峨方への敵対意識をあらわにした忠誠心をかきたててしまうのである。

大仏を拝した折の上皇の言動も，その「善柔の御さが」を集約的に現わす。異国の宗教が日本に伝来し，国土を覆う盛観に対した「いぶかし」という不審は，僧侶の説明に対する反論としては示されず，「露御こたへなくて，たゞたがはせで，物いひたまはず」に終わる。文化五年本は，不審を「御戯のたま」い，僧侶の説明を「露うたがひたまはぬ御ほんじやうにて，御烏帽子かたぶけさせたまふ」上皇の幼児性を帯びた単純な性格を直接に描くが，富岡本は，自己の意志の表明に抑制的な，それ故に近臣らの策謀に操られる「善柔の御さが」の悲劇性を暗示的に描いている。

大仏造営に対して秋成が批判的であったことは，「土木の費宮室にをさをさおとらず，民の課役に苦しむ事，此御時にこゆる御代もあらず。」（金砂・9）とする批判[38]に明らかであるが，作品中に上皇の言葉としては明示されない。仏教批判よりも，不審を表明せずに寡黙に終始した上皇の「善柔」

にして「直き」心性を「此〔御〕本じやうこそたふとけれ。」と評する作者の共感の表現を主としたからであろう。

しかし，事の理非曲直を正しえず，「あしくためんとするには，御烏帽子かたふけてのみおはす」「善柔の御さが」は，再び仲成・薬子らの野望を増幅させる働きをなす。

薬子は，上皇の他意のない食膳の問いを期に，父応神帝の寵愛による継嗣の定めを弟皇子兎遅が辞して兄皇子大鷦鷯が帝位を踏んだ仁徳兄弟の故事を挙げて，「聖の道」として万民の信望を得たことを説き，「今の帝はもろこしのふみ読（み）て，かしこの篡ひかはるあしきを試みさせしよ」と讒言する。また，平城の突然の退位を惜しむ朝臣や民の嘆きを語り，平城の制止を遮って，復位を願う近臣達の心中を明かす。仲成も，復位の理由づけと，武力による征圧の決意を語る。

しかし，仲成らの陰謀は，密かに「心かよはす奈良坂の人」を配した嵯峨方の周到な謀報網のために直ちに明らかになる。平城の重祚の決意を促すべく正月の薬事を用いて迫る薬子らの計画は，その動向を注視する嵯峨方を緊張させ，保身をはかる廷臣らの動きも慌ただしさを増す。その表現の相違を稿本間の異同から確認しておく。

○　「あやし。君峭壁をこえさせたまふまじきに，奈良坂たいらかにこそあれ，青垣めぐりて，わづかに此みかきの内だに，ことごとは貢もの奉らず。恐し恐し」と，ちらしつゝ泪を袖につゝみて立さる時，「御まへに在て聞（く）」と申す。　（文）

○　君は山河をこえていかで在せたまはぬを，悲し悲しとて，泪を袖につゝみもらしたり。此時御前にありて聞しより外は正しき事は知侍らずと申。　（天）

○　「君峭壁をこえさせまじきに。奈良坂たひらなれど，青垣山の外の重の山路也。この御墻の内だに，ことごとは貢物たてまつらぬ。悲し悲し」とて，涙を袖につゝみもらしたり。此時御前に侍りて聞（き）し外は，正しき事しらず侍る。聖代に生れあひて誰かは兵杖を思ふべき」と申す。　（富）

三稿本のうち，文化五年本は，薬子らの煽動に動かされた上皇が重祚の是非を近臣に諮るが，誰も答える者はなく，その謀り事は失敗したので，正月の御膳に度峭散がないことに気づいた薬子が「あやし」と騒いで帝が軟禁状態に置かれているかのように思わせ，重祚を決意させようと謀ったことを示す。また，天理冊子本は，より簡略・直截な表現で重祚を求める文意をなしている。

一方，富岡本は薬子の綿密な計算を描いて複雑な表現を取っている。度峭散を献上しなかったのは薬子自身の意向であり，「嶂山ノ悪気ヲ避ク」(延喜式)という度峭散を外したのは，上皇が平らかな奈良・大和においでになって，奈良坂を越えて青垣山の外の険しい山路を越えていこうとするお気持を持たないように，上皇の身体をいたわる心配りとして語られる。その実，この大和の地にあっては貢物さえ十分ではなく，帝位を追われた者が世の中から忘れ去られた不自由な境涯を嘆き，暗に重祚を勧めるものである。

平城を帝位を追われた者として同情し，嵯峨帝の冷酷な処置を非難する内容を持つわらべ歌の流行も，仲成・薬子による世論操作を意味するのであろう。

しかし，嵯峨方は平城方の平城自身を含む不穏な動きを無言で注視するのみで，その動きは描かれない。また，嵯峨方の推問に対して，「是は薬子・仲成等がすゝめまいらす事也」「聖代に生れあひて誰かは兵杖を思ふべき」と陳じて事件の全責任を仲成・薬子に負わせ，嵯峨方への忠誠を誓う平城の近臣らの背信と巧みな保身ぶりも強調されている。事件は，反乱の直前を制した嵯峨方の素早い鎮圧の動きと，仲成の誅殺，薬子の自害，及び平城上皇の皇子高岳親王の廃太子の処置によって収束される。

高岳親王の立太子は，平城帝が「先だいの御寵愛殊なりしによりて」神野親王を皇太弟に据えたのと同様に，嵯峨帝が「上皇のみ心とりて」定められたのであった。父子間の私的な寵愛による願望と，それを忖度した政治的な思惑による皇嗣決定の傾向に従ったものであり，遡れば応神帝による兎遅皇子の立太子も同事情による。兎遅は皇道を守るために自害し，高岳親王は太子を廃されて僧籍に下るが，嵯峨のみその智略によって皇位を踏む。

「天津処女」には，高岳廃太子の代りに実子を

立てず，弟の「大伴の皇子を太子に定（め）たまいて，上皇をなぐさめ」，「たふとき叡慮」の世評を得た嵯峨のしたたかな人心収攬策が記されている。しかし，この政策的な皇位継承はのちの承和の変の遠因をなすことになる。この変は，仁明帝（嵯峨の皇子）の即位にあたって淳和帝（大伴）の第二皇子恒貞親王が太子に据えられたが，仁明帝と藤原順子の間の皇子道康親王を皇位につけるための藤原良房（順子の兄）らの陰謀がからんだ事件であった。結局，恒貞皇太子は「この反逆のぬしに名づけられて，僧となり，恒寂と申し給へる」ことになる。

恒貞親王の運命の変転を生んだ「受禅廃立のあしきためし」は，高岳親王にもあてはまる。しかし，高岳親王は皇嗣から僧籍への境遇の転変を自覚的に受けとめて，悲劇的な運命を自立の機会へと転化せしめる。受禅廃立の策謀が渦巻く政界を離脱し，仏道を道詮，空海に学び，「猶奥あらばや」と唐土に渡り，「行々葱嶺をこえ，羅越国にいたり，御心ゆくまで問（ひ）学びて，帰朝」し，精神的充足を得たのであった。善柔な帝王の血脈の自立的な変化を示すものであろう。

だが，そのことはまた，周囲に帝王の資質，現実的な統治能力の具備を期待させたのであろうか。「此皇太子の御代しらせたまはゞや」という廷臣のひそかな願望も記される。羅越国に崩じたとされる『元亨釈書』第16の記事に従った文化五年本に対し，天理冊子本，富岡本がその帰国を記したのは，平城を擁して滅んだ仲成・薬子らの外にもその血脈の再擁立を画策する勢力が存在する，政界の複雑で流動的な様相を暗示する意図によるのであろう。しかし，高岳親王の自足はむしろ政界への復帰の可能性を絶たれた厳酷な現実によって保障されたのであった。

作品は，破局を迎えた平城上皇の「かたくしろしめさゞる事なれど，たゞ『あやまりつ』」という重い後悔・自省の言葉と，剃髪を記して閉じられる。

ところで，結末に付せられた上皇の関知しなかった「事」とは，具体的にどのような内容を指すのか。諸注は等しく「尚侍従三位藤原朝臣薬子常侍帷房。矯託百端。太上天皇甚愛。不知其姦。遷都平城。非是太上天皇之旨。」（日本逸史・巻32）の記述を挙げるが，薬子・仲成の佞奸な性格，平城遷都と平城復位の策謀を上皇は当然知悉していた。文化五年本には，重祚の是非を近臣に諮った上皇が「かたくしろしめさゞれど，近臣等にみことのらす。上皇『あやまりつ』とて，御ぐしおろし」たと記されている。

また，「よからぬ事も打（ち）ゑみて，是が心をもとらせ給（ひ）ぬ。」「薬子・仲成等，あしくためんとするには，御烏帽子かたふけてのみおはす」と記される平城の耐忍と消極的で優柔な態度，薬子の煽動と仲成の陰謀具申に対する曖昧な対応には，その理非を正し，両人を服従せしめる雄々しい精神の発現も，努力も認められない。従って，「あやまりつ」の自省・後悔の内容も不明瞭であるといってよい。

上皇の後悔と自省は，禅譲思想の欺罔と簒奪による争乱の回避をはかった皇位移譲の試みが，予想を越えた政界の熾烈な争闘の構図の前に敗北し，悲惨な破局を招いたことの自責の念に発するものであろう。また，帝王たる統治能力を欠き，有効に働きえなかった自らの「善柔」にして「直き」性格に向けられたものでもあった。

しかし，皇位継承をめぐる暗黒の構図は，個人の理想や意志を越えた，いかんともしがたい歴史の必然の流れであった。その流れは，「英才」嵯峨天皇の儒教政治と唐風文化の浸透を生み，多くの「受禅廃立のあしきためし」を重ねながら，淳和・仁明朝に更なる華美・軽佻の度を加えることになるのである。

〔注〕

(1)　漢文資料は横書きのため返り点を省いた。
(2)　『幻妖の文学上田秋成』（昭57・2）の「血かたびら」。
(3)　日本古典文学大系『上田秋成集』19頁解説。
(4)　「秋成『血かたびら』考―『老子』的思惟について―（「大谷女子大学国文」5号，昭50・5）。
(5)　「『血かたびら』の論―春雨物語の再評価―」（「文学」32巻2号，昭39・2）。
(6)　「春雨物語『血かたびら』私考―平城帝の性格をめぐって―」（「香椎潟」16号，昭45・9）。
(7)　「『血かたびら』の構想」（「近世文芸研究と評論」5号，昭48・10）。
(8)　「春雨物語『血かたびら』考―平城帝の形象化をめぐって―」（「実践紀要」21集，昭54・3）。
(9)　(2)に同じ。
(10)　『秋成の研究』（昭46.5）の「『白峯』と『血

かたびら』」。

(11) (3)に同じ，389頁補注。

(12) 『上田秋成文芸の世界』（昭54・5）の「『血かたびら』の世界」。

(13) (6)に同じ。

(14) 「春雨物語『血かたびら』・『天津処女』論―秋成の天皇史観について―」(「大谷女子大学紀要」16号1輯，昭56・9)。

(15) (8)に同じ。

(16) 『秋成文学の世界』（昭54・3）の「血かたびら」。

(17) 「血かたびら」の本文は，日本古典文学大系『上田秋成集』所収の富岡本に拠った。また，佐藤本の草稿と文化五年本（桜山文庫本）は浅野三平氏編『春雨物語・付春雨草紙』に，天理冊子本は木越治氏の翻刻(「金沢大学教養部論集」人文科学編，22－2，昭60・3）に拠った。ただし，横書きのためくり返し記号「〈」の部分は二度書きにした。

(18) 『春雨物語』(昭22・4，積善館）解説，日本古典文学大系『上田秋成集』頭注。

(19) (7)に同じ。

(20) 「『血かたびら』をめぐって」(「皇学館大学紀要」10輯，昭47・1)。

(21) 日野龍夫氏『図説日本の古典・上田秋成』(昭56・2）191頁。

(22) 「春雨物語『血かたびら』私論」(「愛媛大学法文学部論集」文学科編・10号，昭52・12)。

(23) (12)に同じ。

(24) (7)に同じ。

(25) 大輪靖宏氏著『上田秋成文学の研究』(昭51・1）の第二部第一章第二節「『血かたびら』における平城帝の生き方」。

(26) (6)に同じ。

(27) 北山茂夫氏著『続万葉の世紀』(昭和50・11)「平城上皇の変についての一試論」。

(28) 目崎徳衛氏著『平安文化史論』(昭和43・11)「平城朝の政治的考察」。

(29) (5)に同じ。

(30) 広末保氏「『血かたびら』をどうよむか」(「日本文学」28巻2号，昭54・2)。

(31) (6)に同じ。

(32) (25)に同じ。

(33) 井上光貞氏著『日本古代の国家と仏教』(昭46・1）前篇第四章「律令的国家仏教の変革」。

(34) (25)に同じ。

(35) (12)に同じ。

(36) (7)に同じ。

(37) 鷲山樹心氏著『秋成文学の思想』(昭54・1）「『血かたびら』の思想」。

(38) 『遠駝延五登』にも殆ど同内容の批判がある。

60・9・10稿

An Interpretation of "Chi katabira" in *Harusame-monogatari*

Toshikazu KATSUKURA

"Chi katabira" by Akinari Ueda is his important historical novel that depicted the accession to the throne in the early Heian period.

This novel is set during the reign of the emperor Heizei, who is the central character and whose gentle and upright nature is the focal point of the story.

In contrast to the simple and guileless Heizei stands his brother the Crown Prince Kamino.

In this novel, Akinari propounded his view of history on an accession to the throne.